教えの庭から

先祖様を供養する

出雲市斐川町・仁照寺住職　江角　弘道

私たちが、お墓にお参りするのは、そこに亡き人のお骨があり、そこで姿を変えて眠っていると信じているからです。けれど、亡き人は、本当にお墓にいるのでしょうか。今から10年ぐらい前に「千の風になって」という歌が流行しました。その歌詞には、「私（亡き人）はお墓にはいません。秋には光になり、冬は雪になり、朝は鳥になって、あなたを目覚めさせる、夜は星になってあなたを見守ります。私は目に見えない〝千の風〟になって、大空を吹きわたっているのです」とあります。

今日の理科教育では、こうした言い回しは、「主観的」であり、「真理ではない」とされます。科学的な真理とは誰が見ても変わらない純粋に客観的なものでは、「生活しているもの」にしか宿らないものとされるようになってしまいました。

しかし、仏教では、草木はもとより、山も川も、この大地も、すべてに仏性（ぶっしょう）―をみるなり」とあります。

お墓参りは、亡くなった方たちの菩提（ぼだい）を弔い、感謝の気持ちを伝える大切な行いです。私たちが今日ここに生きていることは父母・先祖のおかげであり、また周囲の人々、さらには大自然の恵みによって生かされているという事実を忘れてはなりません。そのすべてを「仏様（大いなるもの）のおかげ」と呼ぶのです。この広い宇宙で、仏様がいつも私たちを見守っておられます。

江戸時代に仁照寺で、実際にあった出来事があります。天保2（1831）年2月に、松江藩が斐伊川の治水と新田開発政策のため新川開削工事を行ったとき、仁照寺があった場所が工事区域に指定され、移転を余儀なくされました。この大規模な工事は、困難を極め、毎日2千～3千人、2年間で56万5千人もの人々が動員されたと言われています。工事の途中で、寺にあった墓が掘り起こされ遺骨がそのまま放置されるという事態が起こりました。その後、付近で夜な夜な亡霊が出没し、地元民を困らせるようになったのです。地元住民の訴えを受け、松江藩も、先祖を粗末に扱ったことを認め、供養料を支払いました。翌年、その供養料をもとに「新川地亡霊地蔵塔」が仁照寺境内に建立され、供養をしたところ、亡霊は出なくなり、地元民たちは安堵（あんど）しました。

この出来事は、先祖様をきちんと供養することの大切さを私たちに教えてくれます。今、朽ちかけながら地蔵塔は、ひっそりと立っています。

先祖様は目に見えませんが、いつも私たちを見守ってくださっています。仏壇の前でお経を唱えて、手を合わせる。その日々の積み重ねが、先祖様への感謝と苦労の心を育むのです。

挿絵　平尾恵郷

自然の要素には生活がない―すなわち宇宙の生命の根源―が宿ると考えます。これは、「山川草木国土悉皆（さんせんそうもくこくどしっかい）成仏（じょうぶつ）」という思想です。道元禅師が執筆した「正法眼蔵」には、「山河をみるは仏性